滑稽と俳句の伝統 2

伊藤浩睦

俳句の伝統を言うのであれば、高濱虚子や正岡子規ではいけません。
最も古いものから調べようと思い、まず室町俳諧を読みました。

『竹馬狂吟集』『犬筑波集』『守武千句』といったものですが、面白いのです。竹馬は編集者も句の作者も不明、犬筑波は、選者は山崎宗鑑と分かっていますが句の作者は不明で、これは意図的に句の作者の名を隠したようです。

当時の俳諧は権威となっていた連歌に対してアングラなもので、公家や僧侶や上級武士が、権威を茶化すような感じで行われていましたから、名前が出ると困る人が多かったのでしょう。

下ネタが多いのも特徴で、寄席ではやれないような噺を好事家を集めてやる、落語家のばれ噺会のような趣があったに違いありません。

守武千句になると、なるべく下ネタを排除して、作者の名が出ても困らないようにしたもので、文芸としてはともかく、笑いの要素では物足らないところがあります。

江戸時代になると松永貞徳が出て、俗語を使う連歌ともいうべき　貞門俳諧が流行します。一句の限りの面白さではなく、付け合いの際の執り成しや見立ての面白さ、言葉による景色の変化の面白さが主眼でしたが、付け合いという作り方の妙味が感じられて楽しく読めます。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

そのあと西山宗因の談林俳諧になりますが、これは言葉遊びをどこまで徹底できるかを競うもので、謡曲の文句の嵌め込みから始まり、漢籍を強引に句に突っ込んだところで破綻しますが、言語遊戯の限界に挑戦した奇矯な面白さは無類なものがあります。

室町俳諧は連歌をやっている知識層がアングラでやり始めたものですが、江戸俳諧は連歌を押しのけるかたちで発展して、幅広い大衆の文芸となってゆきます。

大衆の文芸ですから猥雑な要素がいっぱい組み込まれていて、句座のなかで受ければなんでもありの世界が繰り広げられていたわけです。

もうひとつの俳句の伝統として、点取りの世界がありました。参加費を出して句会に出るわけですが、高得点を取ると、払った参加費の何倍もの賞品を受け取ることができたので、高得点を得るためには努力を惜しまない、どんな変わった趣向でもやってみるとの意欲を、句会に出る人たちは持っていました。

先月号でも書きましたが、今の句会と来たら似たような句ばかりで、見ている方が飽きてしまう状態はどうなっているのかと思います。

昔のような賞品目当てではなくても、せっかく句会に出たのだから目立たなくては損だといった気分がなくなってしまい、逆に目立つことなく、皆と似たような個性のない句を提出して、静にしていることにより、句会の人たちから、良い人だと思われたいといった気分の方が強くなってきているのです。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

その中で、句座を笑わせようとする人間は異端者扱いされるのが、現在の俳句世界であるといえます。

end

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。